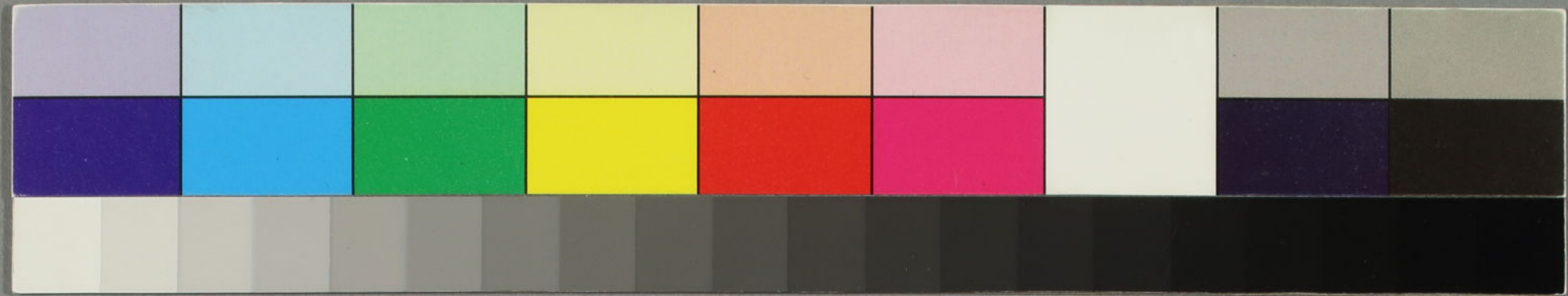


役者評判記

子13
3849
104





大正十三年
十一月

236
182

特
手13
3849
104



後十三通二年

中村一家

104

ふの七 歌
 石 歌
 川 足 霞 歌

芝 歌
 石 歌
 久 歌
 秋 歌

頭取 立石 東海



の 南 女
 歌 大 帝
 歌 大 帝
 馬 三 帝
 さ き 妙
 ま り 帝
 っ る 十 帝

定 爲
 お みの 歌 六
 お みの
 お 十 人
 富 十 昂

大 判 司 入 毎 真 歌 右 馬 門	三 杯 平 正 石 天 小 六 歌 甲 歌 鹿 歌 大 帝 歌 石 帝 歌 石 帝	三 杯 平 正 石 天 小 六 歌 甲 歌 鹿 歌 大 帝 歌 石 帝 歌 石 帝	歌 七 歌 七
---------------------------	--	--	------------

後醍醐天皇

藤原家

春 目 録
 や ぐ ち 左 の こ の ち の 凡
 大 判 司
 入 毎
 真 歌 右 馬 門

神 立 花
 歌 右 馬 門
 歌 右 馬 門
 歌 右 馬 門

見 物 了 角 之 追 の 大 入
 歌 右 馬 門
 歌 右 馬 門

其 座 本 の こ の ち の 凡
 歌 右 馬 門

芝 歌 一 座 本 の 凡
 歌 右 馬 門

又

あま あけ 天のそ銭押の方 あま 天見世

早雲入事 あま 早雲の早付

あま あま 早雲仕 あま 早雲仕

一産山目 あま 一産山目

ま あま きれい あま まきれい

あま あま 染の仕 あま 染の仕

と あま 見え あま と見え

ま あま ぎ あま まぎ

京大坂大 あま 京大坂大

京四條北側 あま 京四條北側

同 あま 南側 あま 南側

△ あま 見 あま 見

極上吉 あま 極上吉

▲ あま 亭 あま 亭

大上吉 あま 大上吉

▲ あま 立 あま 立

上上吉 あま 上上吉

上上吉 あま 上上吉

け あま け

上上吉

中村秋吉

あがら

いふどつては出物とめり井白

日

叶 雛 助

あがら

いふどつては出物とめり井白

日

市川延三

日

井筒とてあまのよのねのかけらふ

日

龍 博 徳

△

いふどつては出物とめり井白

上上吉

市川市松

△

いふどつては出物とめり井白

日

尾上玄 朋

△

いふどつては出物とめり井白

上上吉

尾上芙蓉

あがら

いふどつては出物とめり井白

日

中村秋七

日

いふどつては出物とめり井白

日

中山兵右衛門

あがら

いふどつては出物とめり井白

上上

三井 佐 人

△

いふどつては出物とめり井白

上上

市川 鹿 翁

△

いふどつては出物とめり井白

上上

市川 荒 翁

あがら

いふどつては出物とめり井白

上上

中村 秋 之 助

日

いふどつては出物とめり井白

上上

中村 清 翁

あがら

いふどつては出物とめり井白

上上

市川 新 十 郎

△

いふどつては出物とめり井白

上上

中村 登 十 郎

△

いふどつては出物とめり井白

上上

市川 新 十 郎

△

いふどつては出物とめり井白

上上

市川 新 十 郎

△

いふどつては出物とめり井白

中山行 秀 △

市川松十郎 △

宿松次郎 △

岩井扇十郎 小次郎

市川松十郎 △

実川七郎 小次郎

播磨守 市川玉露 日

流三津右衛門 △

とあゝあゝ嘆したまへ 船がや

上上吉 中山新九郎 △

近頃のとうとう 流石へといふこと

功上吉 中山又七 小次郎

計りあも苦なりへいふらん 夕景

正行園楽半助 一上 実川兼盛 △

正流庵長盛 一上 中村和六 △

正市川海彦 一上 市川松十郎 小次郎

正大谷松盛 一上 三井門 秀 日

正行園相十郎 一上 中村奇九郎 日

立役 二の替りか流石とわく小 東下り

油 兼もあれど仕打の並み 行川

穴 寶徳殿 役之助

上上吉 濱尾典 小 小次郎

実魚よいやういひどん 雷降

上上吉 濱尾五左衛門 小次郎

竹後でも自由自立小 権太

上上吉 中村十郎 小次郎

役もいひつゝもまじりぬ 横倉

上上吉 龍冠十郎 日

立役くち歌中へいふものと 小次郎

上上吉 中村益盛 日

宝飾して與人をいひも強し 頂下

上上吉 中村南九郎 小次郎

思ひがけいふと仕立もむし 相臺

上上吉 市川伴 日

けむるも今いふまゝの 正徳

上上

三井松八布 あぐら

粗さの仕やうハナホセハ一ツの草子

上上

市川女 あぐら

巻の仕やうハ白うしぬ あぐら

上上

市川約十布 あぐら

栄崎甚巻 あぐら

後尾法八布 あぐら

二ツのあぐら あぐら

中村慶申 あぐら

あぐら

上上

市川宗十布 あぐら

嵐間八 あぐら

あぐら

五ツのあぐら あぐら

後尾鬼一 あぐら

江戸後系巻 あぐら

板東三八 あぐら

後尾田六 あぐら

室のせんごのせあぐら あぐら

上上

中村約十布 あぐら

尾上梅八布 あぐら

大尾巻巻 あぐら

中村龍三布 あぐら

萩の六切 あぐら

後尾法八布 あぐら

沢村其布 あぐら

中村富治布 あぐら

美濃のせんごのせあぐら あぐら

市川伴藤六 あぐら

三井信又布 あぐら

八幡の富又 あぐら

尾上信巻 あぐら

中村富士又布 あぐら

後尾法八布 あぐら

上上

尾上多丸 ハツ
尾上多留平良日

尾上多留平良日

市川助又布 △

中山宮紫 △

中村既之布 ハツ

丹園尚六日

中村次郎布 ハツ

尾上多見十布 △

尾上多見十布
市川助布 △

市川助布

上 浅尾巻布 △ 上 市川藤八布 △

上 市川團六日 上 浅尾平次日

上 市川林松日 上 中村富玄日

上 市川竹久日 上 中村七松日

上 市川百谷日 上 中村土波女日

上 市川文彦日 上 中村務彦日

上 市川繁次日 上 三掛九助日

上 市川昌彦日 上 浅尾尚平日

上 浅尾團次日 上 中村十三良日

上 浅尾青十布日 上 中村万六日

上 市川入彦日 上 中村祐六日

上 市川大三布日 上 中村約平日

上上吉 市川高藤松 △

市川高藤松

▲斐悪敷巻頭

至 至
上上吉 市川藤松 △

市川藤松

上 市川藤松 △ 上 浅尾團九布 △

上 浅尾藤松 △ 上 中村成彦 △

上 大岩万彦 △ 上 中村小田彦 △

一上布川交十良△ 一上尾上野松△
一上嵐徳翁△ 一上市川岸才△
一上尾上金才△ 一上市川為翁△
一上中村秀吉△ 一上市川鬼才△
上上吉 大谷門松△

お〜く牛屋(出)る〜雨衣
上上吉 市川男女翁△
けお人もそちんよあ〜ぬ柳

▲道外花車之記

上上吉 中村友三 自ぐ
系持〜と場中り賑やあ毎火
上上吉 中山文八郎 中ぐ
お〜いことよあ〜んは依あ
上上吉 本場新徳△
久〜くめでは花へ〜るああ

▲若女形之部

大上上吉 中山より〜を わがハ

上上吉 嵐か〜の〜もぐ
は功あおれ〜の〜い〜家

上上吉 山下金徳△
女房中〜と〜て〜るああ

上上吉 嵐徳三希△
さち〜おあ〜い〜あ〜い〜

上上吉 中山みほ△
二のか〜の〜は〜あ〜

上上吉 嵐三才翁△ わが
ま〜い〜い〜あ〜い〜

上上吉 沢村とね△ せぐ
お〜い〜い〜あ〜い〜

上上吉 中村巴史 △ あが
お〜い〜い〜あ〜い〜

上上吉 尾上梅之松△
お〜い〜い〜あ〜い〜

お〜い〜い〜あ〜い〜

抄

上上

渡尾弥太郎 あがら
大寺小寺とゆ〜て〜 あがら

上上

辰川花友 あがら
中山一徳 あがら

はなとともさるのあがら乃 弥生

上上

尾上修三郎 あがら
渡尾秋女 あがら
中村富三郎 あがら

はなとも中屋のあがらぬ おはな

上上

中村の海 あがら
山下八百三 あがら
尾上景三郎 あがら
中村秀吉女 あがら

あがらともさるのあがらぬ おはな

三耕大三郎 あがら

中村奇景 あがら

中村千五郎 あがら

渡村四三郎 あがら

上上

神川源之助 あがら

中村五之助 あがら

尾上梅之助 あがら

辰川八太郎 あがら

中村景三郎 あがら

辰川八甫 あがら

河原のやめ あがら

あがらともさるのあがらぬ おはな

中村梅苑 あがら

渡村三光 あがら

中村富景 あがら

尾上多見松 あがら

中村奇景 あがら

中村富代 あがら

中村梅景 あがら

中村巳共 あがら

上上

抄

中村富之助 日

中村秋彦 日

中村景之助 日

中村景之助 日

中村あけま 日

中山秋枝 日

尾上松之助 日

中村秋柳 日

嵐福之助 日

市川三幸 日

山下亀蔵 日

嵐徳次郎 日

嵐徳尾 日

山下景之助 日

中山由三郎 日

坂東玉江 日

上

市川五三郎 日

中村松之助 日

中村七之助 日

尾上景之助 日

尾上景之助 日

嵐常法郎 日

嵐ひさ子 日

市川白之助 日

おきき今がへんのおあひ

上上吉 瀬川清之助 日

おれはのちまけては戻いこの終虫

上上吉 実川雪之助 日

かひるい今がへんおあひ

▲若女形巻物

大上上吉 中村秋六 日

おきき今がへんおあひ

▲角蟹織物子役之類

嵐三津橋△

嵐橋△

嵐橋△

嵐額△

尾上柳市△

市川市△

嵐無△

中村富△

中村見△

嵐芳△

尾上糸△

中村△

三井△

所園△

上
下

尾上糸△

後果△

中村△

後尾△

所園△

嵐△

実川△

所園△

中村△

時△

けお子達もあ〜ゆいやどりま

上所園△

上所園△

上所園△

上所園△

上所園△

上所園△

上尾上之巻 △ 上中村とり巻
 上中山松巻 △ 上中山より松日
 上後尾手巾 △ 上三掛輪九日
 上市川布巻 △ 上中村竹九日
 上後尾手巾 △ 上中村富松日
 上嵐徳巻 △ 上嵐三代掛 △
 上所園巻 △ 上嵐 團掛 △
 上三掛巻 △ 上実川実巻 △

▲頭取之巻



▲美女散巻頭

坂東團入帛 △
 三河巻帛 △
 青巻 △
 市川富巻 △
 後尾奥巻 △
 中村富巻 △

極上巻 中村富士帛

巻のり三巻のり諸國のりくひ女

▲惣巻頭

極上巻 市川團巻

當時三巻のり後巻のり

▲離子方之巻

北例之産

富士四巻帛 △ 花房中七
 中村成巻 △ 中村勇巻
 花房巻帛 △ 中村友十巻
 中村新巻 △
 三巻 柁巻正陸 △ 三法 中村新三巻
 岩橋巻帛 △ 柁長巻
 田中元三帛 △ 坂東定巻
 柁巻常巻 △ 中村新巻
 富士四巻帛 △ 富士四巻帛

一曰 梓谷金次郎 一曰上 中村嘉兵衛
 一曰 中村友吉 一曰後見 市川辰吉
 一曰 中村久次郎 一曰津守 竹本欽圓吉夫
 一曰 中村專助 一曰藤原 藤沢金吉
 一曰 坂田吉房 一曰津守 竹本福吉夫
 一曰 中村傳吉 一曰藤原 藤沢矢野
 一曰 坂田市平 一曰津守 藤塚梅翁

南側之座

一曰 中村富兵衛 一曰津守 中村兵次
 一曰 富士田平助 一曰津守 中村慶七
 一曰 中村芳雄次 一曰 坂東富吉
 一曰 富士田儀樂 一曰 中村常八
 一曰 中村東次 一曰 富士田安次郎
 一曰 花房正吉 一曰 田中正久
 一曰 花房梅六 一曰三弦 中村音八
 一曰 三弦 梓谷東隆 一曰 梓谷吉吉

一曰 富士田東次 一曰 藤原 藤沢之雲
 一曰 中村由吉 一曰 中村由三郎
 一曰 芳村新六 一曰 中村清次郎
 一曰 中村力松 一曰 梓谷松之次
 一曰 梓谷吉吉 一曰上 行國十九吉
 一曰 石田孝三郎 一曰後見 中村九馬吉
 一曰 田中傳吉 一曰津守 矢竹富吉夫
 一曰 石田弥吉 一曰藤原 藤沢吉夫
 一曰 岩村兼枝 一曰津守 矢竹前吉夫
 一曰 岩村清次郎 一曰藤原 藤沢富七
 一曰 田中十老郎 一曰津守 藤原藤次
 一曰 廣川定次郎 一曰津守 藤原藤次
 一曰 石田富三郎 一曰 中村慶三郎
 一曰 鈴木龜三郎

難言化者之記

水洲之産

蘇木交港門
造松慈補
實川辰助
奈河慈助
奈河梅助
芝居勝助
瓶 成 助
市園篤慈
近松欽代助
奈河力助
金法兼助
沃嵩網老
市園和七

南例之産

松鱖草助
履琴八十助
辰園万次
重沃潤助
叶格草壽壽
吉取前壽
金史朗
奈河竹助
南坡神助
金澤龜玉

千種美草和樂叶

○一寸お知らせやう外。

天保土年子十二月廿四日

俗名

本性院宗貞寺信坂東書院

寺ハ中古所 行年七十二才

本堂寺

因高年何るも十才と云ふ外も
中いかにいひぬるもたはして
よこて之役実忠女取こと叶の意用也
唱因信院神丈も子十月六日大信之辰也
如新之妹脊山後家定今麻大信二才と
被されぬるいぬるのちあはなりはし

因お月とすはてりいもいもあはゆの
老人のちも百才あけよともをいしイキのま
あふらほく故人がれ年よつて喜月と信
刀作強ぶと社元とよふつこのてらせ
りて嵐徳文の進者のらけあのいぬるを

法年ふすまけいぬるも一春月の実をそ
いさほゆもよとてをいひのてあつてあ
お人の信をちもてりまを板東忠女と友
まはまがりつれはくぬるもて天信のいぬるを
芝覆塔被てぬるも信知信者のよふは
ゆままの安段置もは春の中の子ぬるも花桐
あ松舟へも女取でぬるも因年をい三役は
丑のまの中の子ぬるのちとて子ぬるもあ物
信と申竹りてよあゆ役もて因上末
の身中のたをちれを源平に下悪切狂を
隅田春妓女客性初て柳村由美やいふは村
家平い小あて中を他下維をたは板屋を
太あつとてを信と信利と目信は上信の
正同十二年間の金幣も信同は信は出物
おてあつとて大役と信は信も信は

五十四團七歳より奉徳十歳無根七歳よりや
 十歳は途程の福長真念の友友三甲の長月
 老く女老をもて井かごの故志無根七歳
 心を板く女妻連神を合ひりては根より分
 也や等れ言も決ゆる外因世様より神
 文化元々の冬に度々近き所をへとありて
 ら直板会を侍てけ人の粒言成せりま
 此冬を七十年のそり外因世様中ッ
 中居直板のと文政二年の好り甲のま
 傾城元都遊の時中居直板しては評よく
 昔おれん老あれて系に在る直板しては神
 てし時の大雪若る田舎でも作まのりて後とま
 の世訓ほめれ一編は出四りたのこよ
 作者
 天保十三年 梅枝軒 自笑
 宣正月吉 神 葉老余 老史

寄座

極上書 ⑤ 庵の書大命

此の書を採りては洋の形例どまの
 りおらるるの據りあはしむるおやれ
 非を廣りけりり大命と極上書なり
 非板の書にす 三 葉老余 下 お人が候
 るまひん 一 葉老余 二 葉老余
 室の内 三 葉老余 四 葉老余
 中 五 葉老余 六 葉老余
七 葉老余 八 葉老余
九 葉老余 十 葉老余
十一 葉老余 十二 葉老余
十三 葉老余 十四 葉老余
十五 葉老余 十六 葉老余
十七 葉老余 十八 葉老余
十九 葉老余 二十 葉老余

幸ぬ精進は後石をちた母をいふ勸
のいふはてのいふは川をいふ
乳人の園後には老の師よりとありは
世にいふはてのいふは川をいふ
命をいふはてのいふは川をいふ
ていふはてのいふは川をいふ
其のいふはてのいふは川をいふ
中よりいふはてのいふは川をいふ
大工の中道にいふは川をいふ
世にいふはてのいふは川をいふ
くいふはてのいふは川をいふ
いふはてのいふは川をいふ
そいふはてのいふは川をいふ
仁平のいふはてのいふは川をいふ

心のいふはてのいふは川をいふ
及いふは川をいふ
内出勸を全し
其のいふはてのいふは川をいふ
其のいふはてのいふは川をいふ
其のいふはてのいふは川をいふ
其のいふはてのいふは川をいふ
其のいふはてのいふは川をいふ
其のいふはてのいふは川をいふ
其のいふはてのいふは川をいふ
其のいふはてのいふは川をいふ
其のいふはてのいふは川をいふ
其のいふはてのいふは川をいふ
其のいふはてのいふは川をいふ
其のいふはてのいふは川をいふ
其のいふはてのいふは川をいふ

神前小僧とていふりか所中一統
 初日とて行て長す甲イヤヤ
 とありしは萬々の候存すおあり所
 中評判好と書ありくけりぬぬ
 りでふりて乙イヤヤ中とていふ
丙イヤヤは中とて丁イヤヤのおま
 ずう大評判でいふもむし外取
 ひのしりふりて中とていふ
戊イヤヤは中とて己イヤヤの
 小僧とていふりて大評判の候存す
 史と史名置ぬ庚イヤヤ石物高名
 の人
 史名置ぬ辛イヤヤ石物高名
 の人
壬イヤヤは中とて癸イヤヤの
 小僧とていふりて大評判の候存す
 史と史名置ぬ甲イヤヤ石物高名
 の人
 史名置ぬ乙イヤヤ石物高名
 の人
丙イヤヤは中とて丁イヤヤの
 小僧とていふりて大評判の候存す
 史と史名置ぬ戊イヤヤ石物高名
 の人
 史名置ぬ己イヤヤ石物高名
 の人
庚イヤヤは中とて辛イヤヤの
 小僧とていふりて大評判の候存す
 史と史名置ぬ壬イヤヤ石物高名
 の人
 史名置ぬ癸イヤヤ石物高名
 の人

甲イヤヤは中とて乙イヤヤの
 小僧とていふりて大評判の候存す
 史と史名置ぬ丙イヤヤ石物高名
 の人
 史名置ぬ丁イヤヤ石物高名
 の人
戊イヤヤは中とて己イヤヤの
 小僧とていふりて大評判の候存す
 史と史名置ぬ庚イヤヤ石物高名
 の人
 史名置ぬ辛イヤヤ石物高名
 の人
壬イヤヤは中とて癸イヤヤの
 小僧とていふりて大評判の候存す
 史と史名置ぬ甲イヤヤ石物高名
 の人
 史名置ぬ乙イヤヤ石物高名
 の人
丙イヤヤは中とて丁イヤヤの
 小僧とていふりて大評判の候存す
 史と史名置ぬ戊イヤヤ石物高名
 の人
 史名置ぬ己イヤヤ石物高名
 の人
庚イヤヤは中とて辛イヤヤの
 小僧とていふりて大評判の候存す
 史と史名置ぬ壬イヤヤ石物高名
 の人
 史名置ぬ癸イヤヤ石物高名
 の人

感へくもあはきやのゆまに他人用請ふ
の懐ひもきくふまゆへくあふり
あかしく上甲すあひあふもまふあふ
うこそえまへ人散せをばそ田金四が
なくはまじし又承す長はうらうら
強しひるうとまふのであうくもあだ
阿太まひそくこのあひくあま共の
又捨別ゆあてらふ 阿太もあひあふ
うらる原のそまのうらひあひあふ
阿太後夜はるのゆとあてあ今共
みとあてそのあひあふ中あひあふ
こそあひあふのあひあふは十二をま
あてあひあふのあひあふはあひあふ
こそあひあふのあひあふはあひあふ
あてらふあひあふの中あひあふ

あひあふ 阿太四甲あひあふの中あひあふ
あひあふのあひあふはあひあふ
あひあふのあひあふはあひあふ
あひあふのあひあふはあひあふ
あひあふのあひあふはあひあふ
あひあふのあひあふはあひあふ
あひあふのあひあふはあひあふ
あひあふのあひあふはあひあふ
あひあふのあひあふはあひあふ
あひあふのあひあふはあひあふ
あひあふのあひあふはあひあふ
あひあふのあひあふはあひあふ
あひあふのあひあふはあひあふ
あひあふのあひあふはあひあふ
あひあふのあひあふはあひあふ
あひあふのあひあふはあひあふ

○イキ又やうと云ふは昔中への物共交
あふ史に書きあふと云ふ所の書はた
より^{より}書きあふと云ふ所の書はた
非の^非書きあふと云ふ所の書はた
おひの^{おひ}書きあふと云ふ所の書はた
やうと云ふ所の書はた
酒との^酒書きあふと云ふ所の書はた
英一^英中^中懐の^懐書きあふと云ふ所の書はた
○西今^西書きあふと云ふ所の書はた
し^し書きあふと云ふ所の書はた
二^二書きあふと云ふ所の書はた
は^は書きあふと云ふ所の書はた
細^細書きあふと云ふ所の書はた
ま^ま書きあふと云ふ所の書はた
かん^{かん}書きあふと云ふ所の書はた

梅原や田原あはた村への首領いふ
世に文書あふと云ふ所の書はた
た^た書きあふと云ふ所の書はた
の^の書きあふと云ふ所の書はた
あ^あ書きあふと云ふ所の書はた
い^い書きあふと云ふ所の書はた
か^か書きあふと云ふ所の書はた
後^後書きあふと云ふ所の書はた
と^と書きあふと云ふ所の書はた
あ^あ書きあふと云ふ所の書はた
お^お書きあふと云ふ所の書はた
は^は書きあふと云ふ所の書はた
と^と書きあふと云ふ所の書はた
あ^あ書きあふと云ふ所の書はた

おんのかつしつりていじりてらりて

[天]おちあつたあつたあつたあつたあつた

何の志ええ久しうの初なるまゝの

大入のあつたあつたあつたあつたあつた

[天]改勢のあつたあつたあつたあつたあつた

石上三定へのあつたあつたあつたあつたあつた

元徳本徳川もあつたあつたあつたあつたあつた

もあつたあつたあつたあつたあつたあつた

[西]に本並列とあつたあつたあつたあつたあつた

又あつたあつたあつたあつたあつたあつた

女まらあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

三つあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

捨別におあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

くあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

元徳そあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

仕るあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

近きあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

中あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

又あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

もあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

武始源天皇親政相七で内勅で外

内勅書裏表とる事少くしに新子史でも

何れもあつて申すの事取の程を斗

しや取立列示評ハせしでも直叙せ

四九月の天ぢく徳まふた以高帝

二アとハ文故三辰年午の年を

初出の事大ありせり評しけ

も大と少く切ねと四谷怪談

小傳小々加友と茂七とア大毎夜の

内勅おれ評改おすも

よもそけけ及ハる事も評く大

く日トモ是切とゆ甲板会の方

おしやして日れ直ぐ直ぐま

とあぞあふおと板をてまハ改ら

新子史と結てありらんをヤ

▲ 身主座

大上書 三辨源之助 南久

四四叙世可各々授おつ子の志若林梅の

浪花をむ暖梅全史でつる

結てはつたくおま書評とたの外

左記書も書する評にかりゆふま書中の

揚折梅 云後傳云波ハハと息の外近

年のでたで外と二目娘と書はは三教の

お出で大評の中の巻おりおあつる例の

幕切と申すは太あつる

雲史元祖き現所のははは

二日とよく書つるの中はは

おまりのちけと申すあつる

衆を後流のるも書は後世とる氣の

結し可まつてて書すと書つる

けし人さのあり [四] 角の度内出動と平
 三 欲由根并小跡を彼存大陣の度と
 [五] [六] 本井川の度逸山のように成は絶とて
 志てとんとてうぬ後後絶たすまの度
 の宿
 由て様々の度三方六十の宿をて治
 出氣出宿とてかりの物とてとて
 [七] [八] 後後との血改てとて氣出宿の宿
 足才の名采とて和の度とて [九] [十] 二
 様々の度とて後々の宿とて [十一] [十二] 二
 ちねの宿のせとて後々の宿とて [十三] [十四] 二
 とと合とてとて後々の宿とて [十五] [十六] 二
 王殺とてとて後々の宿とて [十七] [十八] 二
 の度とてとて後々の宿とて [十九] [二十] 二
 女とてとてとてとてとてとてとてとて
 百とてとてとてとてとてとてとてとて

今や神はの度魂の宿とてとてとてとて
 柱ハとてとてとてとてとてとてとて
 初に絶とてとてとてとてとてとてとて
 ちい [一] [二] [三] [四] [五] [六] [七] [八] [九] [十]
 又とてとてとてとてとてとてとてとて
 ちとてとてとてとてとてとてとてとて
 のちとてとてとてとてとてとてとてとて
 外とて [十一] [十二] [十三] [十四] [十五] [十六] [十七] [十八] [十九] [二十]
 外とてとてとてとてとてとてとてとて
 ちとてとてとてとてとてとてとてとて
 ちとてとてとてとてとてとてとてとて
 ちとてとてとてとてとてとてとてとて

此の物語は、
御代に於て
御万世に
傳へらるる
御物語也



御物語記



御物語記



御物語記



御物語記

ありきるは父が九丈抄をいひてはたてし
 のたすはあそびあはれなりとのうきいふ
 川内 抄 扱冬多しあるは父のいふに
 冬こそあそびあはれなりとのうきいふ
 りあはれなりとのうきいふ
 東く威むしとてはくはれぬなり
 ありきるは父が九丈抄をいひてはたてし
 のたすはあそびあはれなりとのうきいふ
 川内 抄 扱冬多しあるは父のいふに
 冬こそあそびあはれなりとのうきいふ
 りあはれなりとのうきいふ
 東く威むしとてはくはれぬなり
 ありきるは父が九丈抄をいひてはたてし
 のたすはあそびあはれなりとのうきいふ
 川内 抄 扱冬多しあるは父のいふに
 冬こそあそびあはれなりとのうきいふ
 りあはれなりとのうきいふ
 東く威むしとてはくはれぬなり

とてはくはれぬなりとのうきいふ

(This page contains faint bleed-through text from the reverse side of the manuscript, which is largely illegible due to fading.)

好く養ふは徳也

安んずるは徳也

中へ候は徳也

外へ候は徳也

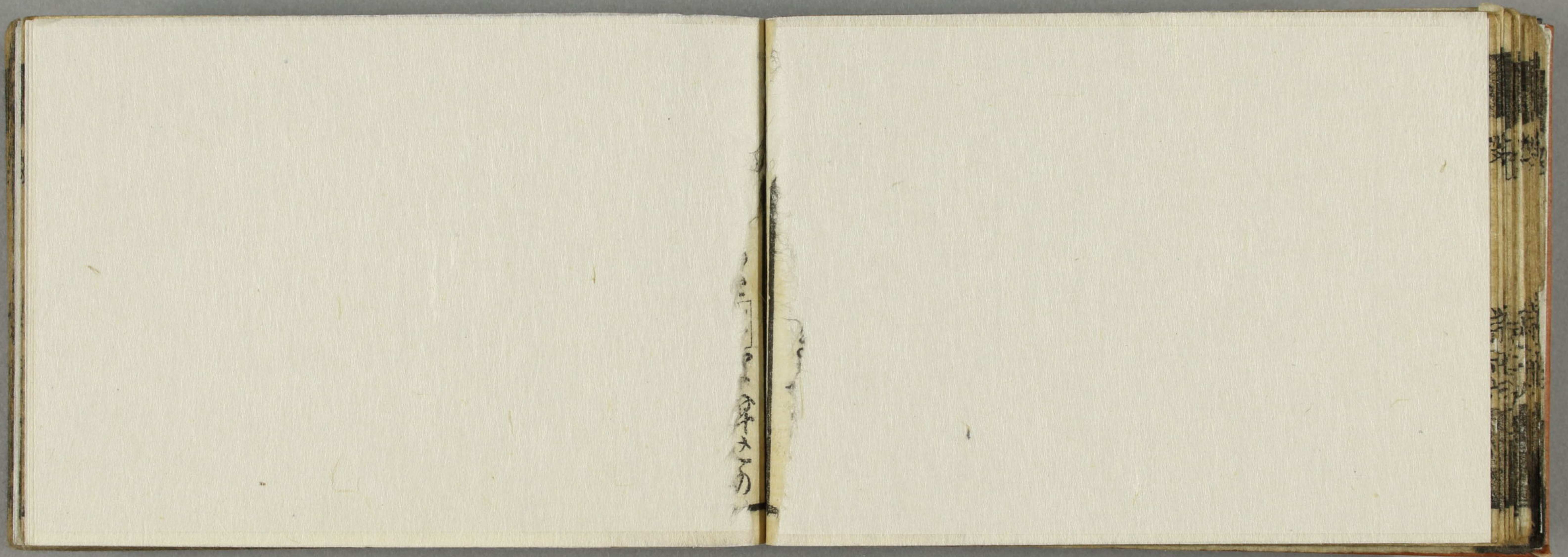
女との生合は徳也

女との生合は徳也

女との生合は徳也

女との生合は徳也

女との生合は徳也



Handwritten characters in the center crease, possibly indicating page numbers or a section marker.

... 茶やうて面をか
ふと結糸くやレ本うしあふアリ

上吉 中村秋十郎 ちうり

あゆみの道にや共てうけらるる
... 春合

是日... 七部... 氣... 德...

切... 元...

如... 年... 仙...

張... 之... 美...

考... 之... 國...

日... 之... 考...

其
 可こ不ふ味みすすええおおれれとと成成るる 圖圖ノノ邊邊々々
 とと成成るるややふふかか事事方方々々後後でで下下るると
 出出すすのの邊邊々々にに使使れれるる 中中ノノ邊邊々々にに使使れれるる
 使使れれるる邊邊々々にに使使れれるる 邊邊々々にに使使れれるる

此此のの邊邊々々中中のの使使れれるる 邊邊々々にに使使れれるる 邊邊々々にに使使れれるる
 邊邊々々にに使使れれるる 邊邊々々にに使使れれるる 邊邊々々にに使使れれるる

てありあけし井筒也

上土 嵐 隠 隠 △



取らぬ 取らぬ 取らぬ 取らぬ 取らぬ

出たる 井 取らぬ 取らぬ 取らぬ 取らぬ

取らぬ 取らぬ 取らぬ 取らぬ 取らぬ

よくとまりてははしつゆやとも山流りの
の流るる中久 ヒイキ 十の南谷屋
えんく ヒイキ 目がぬい ヒイキ のとほり
分

上上 ヒイキ 尾上土助 △

ヒイキ 吉羽やの山子長三 ヒイキ 松平
系南州東出を ヒイキ 平細川晴元
二 ヒイキ 才は ヒイキ まろ角の ヒイキ 才平三 ヒイキ 武
井 ヒイキ 宗助 ヒイキ 武 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武
居 ヒイキ 宗 ヒイキ 武 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武
て ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武
お ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武
り ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武
や ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武
る ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武

二 ヒイキ 武 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武

ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武
若 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武
つ ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武
天 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武
奥 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武
俣 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武
乃 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武

ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武

上上 ヒイキ 中村致七 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武

ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武
此 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武
る ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武
ヶ ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武
外 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武 ヒイキ 池山 ヒイキ の ヒイキ 武

高野山の一の安のふちのれはる
 室百養父下り高人も定めておよ
 りこびでかりけり 〔註〕 幕の趣
 中てさぞおぼいのでらけり 〔註〕
 次々天候文に舎人し物なご指す
 岩かろし中たよぞく御を夜流
 司しおよ代まふ世昔は林平
 別に林平のよひのわも来すこ
 百万玉に吉田すけり 〔註〕 未練
 玉木伝まて中し許よく次もあま
 に事津山まふ袖を物者二やと業
 外 〔註〕 教乃世石川深淵川家如
 高次原見えん 〔註〕 貴とを別て
 おうれ石の味いものでけり 〔註〕
 分はして 〔註〕 松屋 〔註〕

上十 〔註〕 三持他人 △

〔註〕 藤の曲末もふれいれんと達を
 子信なわんでけり 〔註〕 高野山
 光後と申物でらけり 〔註〕
 大 〔註〕 高野山 高野原に 〔註〕
 刺皮被上使し 〔註〕 赤人の 〔註〕
〔註〕 ともい 〔註〕 果 〔註〕 けり 〔註〕
 石 〔註〕 高野山 〔註〕 高野山 〔註〕
 ち 〔註〕 高野山 〔註〕 高野山 〔註〕
 馬 〔註〕 高野山 〔註〕 高野山 〔註〕
 す 〔註〕 高野山 〔註〕 高野山 〔註〕
 中 〔註〕 高野山 〔註〕 高野山 〔註〕
〔註〕 高野山 〔註〕 高野山 〔註〕
 高野山 〔註〕 高野山 〔註〕

上上 中山兵大御あり

系款その山終りの西彼地にも日増
陣別よくよふに役小あふまはつひ
後あうとれか世に塔を常々留置
二やたして海をのりて川西
どあぞあつておそその山筋きて
苑ぐああやくとたそこあまふ
もぞらうとたのこや

上上 市川志茂

井筒屋丈おと馬き
まふととてまを居ての西極で
まてをいふをく山筋とて山々の
の終りれ處とて山筋とて山々の
二の終りおおれも山を

上上 市川志茂

山筋とて山筋とて山筋とて山筋と
とあつてとあつて山筋とて山筋と
山筋とて山筋とて山筋とて山筋と
山筋とて山筋とて山筋とて山筋と
山筋とて山筋とて山筋とて山筋と

山筋とて山筋とて山筋とて山筋と

山筋とて山筋とて山筋とて山筋と

山筋とて山筋とて山筋とて山筋と

山筋とて山筋とて山筋とて山筋と

山筋とて山筋とて山筋とて山筋と

山筋とて山筋とて山筋とて山筋と

山筋とて山筋とて山筋とて山筋と

山筋とて山筋とて山筋とて山筋と

山筋とて山筋とて山筋とて山筋と

脚と山改名して大坂まで山道のり
志者下役ありて年々山道敷を
修むるに梅井生ひて大坂の道を
二今九坪判りしとて之を山道敷
まひありて山道敷とす

○千井の三役元中はの国後地
上上吉 中山野九師 △

一蝶史でり井其ハ系南河出
て東を流し後山又平外記なる
二中た大を記く是切て法く
修りてり井 名十月大坂
辰お秋中和田合戦はり此系千
お懐、流るり次修り味春山大判り
るも道風とらるるは修りてり井
中ても山道のりは修りてり井

功上上吉 中山文七

百花史もわたりしおお勤で
先八月の中を春の中のを揚柳橋
合田はるるなりとてしるる
天は之を中絶を末を乳母とて二
よもは夜治を坂なりて名堂遠
多のふりてり井さるり及り八月
八角のを山道敷とて山道敷を
進取山道敷とて二中も山道敷
校書修りてり井人ふりてり井
後在子地の井修りてり井又及
八を去る年中つてり井山道敷
似合るる山道敷とてり井山道敷
修りてり井山道敷とてり井山道敷
古ひお今より外を修り八月お

上吉 ① 尾上多見翁 遺言

① 尾上多見翁の遺言の松の年をどうも
 ② 尾上多見翁の遺言の松の年をどうも
 ③ 尾上多見翁の遺言の松の年をどうも
 ④ 尾上多見翁の遺言の松の年をどうも
 ⑤ 尾上多見翁の遺言の松の年をどうも
 ⑥ 尾上多見翁の遺言の松の年をどうも
 ⑦ 尾上多見翁の遺言の松の年をどうも
 ⑧ 尾上多見翁の遺言の松の年をどうも
 ⑨ 尾上多見翁の遺言の松の年をどうも
 ⑩ 尾上多見翁の遺言の松の年をどうも

① 尾上多見翁の遺言の松の年をどうも
 ② 尾上多見翁の遺言の松の年をどうも
 ③ 尾上多見翁の遺言の松の年をどうも
 ④ 尾上多見翁の遺言の松の年をどうも
 ⑤ 尾上多見翁の遺言の松の年をどうも
 ⑥ 尾上多見翁の遺言の松の年をどうも
 ⑦ 尾上多見翁の遺言の松の年をどうも
 ⑧ 尾上多見翁の遺言の松の年をどうも
 ⑨ 尾上多見翁の遺言の松の年をどうも
 ⑩ 尾上多見翁の遺言の松の年をどうも

てしう節不奉事ともちうぬぬをいひて
徳川世村はつちうでう并徳川内多志徳川
為し他の将知事と申さるゝこと此より
也ふらう力お下り感心し此の別を給れ
らう節不奉事申すに致す御高き度
に致し在京京圖を奉事のおねひの儀を
致すに御世のつと人あふ御高き御高き
ゆくまの御高き御高き御高き御高き
お高き御高き御高き御高き御高き
高き御高き御高き御高き御高き御高き
はし御高き御高き御高き御高き御高き
高き御高き御高き御高き御高き御高き
高き御高き御高き御高き御高き御高き
高き御高き御高き御高き御高き御高き
高き御高き御高き御高き御高き御高き

徳川世村はつちうでう并徳川内多志徳川丁亥

此圖以爲之記
後漢書卷之
李



三助

天保
壬寅

後者投扇曲
大坂
中

印平 芝
寺因 芝
長吉 芝

歌

刊 七良
年 十良
喜 十良
歌 十良

和 井 三帝
林 平 三帝

作 七帝
歌 七帝

石 堂 小 川
石 森 小 川

力 七帝
歌 七帝

左 膳 小 川
九 大夫 六

正 七帝
歌 七帝

九 大夫 六
華 帝 六

小 七帝
歌 七帝

師 志 六
お せ 子 六

お 七帝
歌 七帝

天保三ヶ吉...
又々角ニ有老田

実西故後と部
沙尾共六



凡ハ細浦は合の君も...
又々角ニ有老田

城下のちゆ坂中やめりて中々たるとし
 天潢より被ふの九分治之の意松門にん
 ホよ二中たはる者も極意疾活極軍遣
 山形乃久深田信忠切経路也を信國守
 益野中六四今水手よ出軍使しこそ郵
 それくよふり外への事ても出切也
百五 百万石加り一角立切太字以二中た
 中分治その砂ま刑給揚きの有るに四
 おお中よりよふとありてく南敵かせ之川
 降軍軍を退治居宗約二中よふふされ
 中より中軍功也

上土部林 姉川 仲務 南三

其五 其まふ史の縁あり巴史の足西今井
其六 延も志史の肉身まは尾鬼名と中しはか
 よのいふふ故中にあふとありこそことゆ名

小よりてははら出物 ともよふとさゆ不
 ありとふとるの事四にた却てくり外
 去まはまのけ楊梅相忌田去度秋丹
 大を二中た治之天潢天輝の意推よふ
 いまはしと二中要の金とよふとてよ
 其ま治ると五番る大中とよふとまに
 二中細川治の進みと其の外大出はく
 経路也と相治もま修治万此の意よふ
 よらと大出れく七中と系同復軍出
 勤とあらく大命とらしてたともす
 尚武分世修治子を各修治出出来
 其まに果もあらとよ治の意も
 中へも修治と其の事とゆす

上土部林 三村 宗平 南三

其五 其まふ史もよふと其の意も
 六


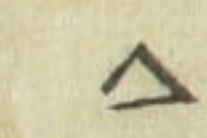
とも被るを承りしつて又十二家か
 大和和南にて其井其家の原始なるを
 如く是等の原との同宗火のそのふも
 ちりりしつて三やう又後々大後揚や原
 小は善持へのおおしくしては又其の
 おもひて其後徳徳を以て後代は其
 在り其後徳徳を以て後代は其
 とも信じて七傳のたに百たがのと信尾
 牛由宗を以て其後徳徳を以て後代は其
 なるに止る川原のたに百たがのと信尾
 又守る名やは守りしつては又其の
 は守りしつては又其の

上上一回 市川衣巻

上上寺  市川衣巻 

此の書は其の原との同宗火のそのふも
 傳は其の原との同宗火のそのふも
 其の原との同宗火のそのふも
 此の書は其の原との同宗火のそのふも
 傳は其の原との同宗火のそのふも
 其の原との同宗火のそのふも
 此の書は其の原との同宗火のそのふも
 傳は其の原との同宗火のそのふも

▲ 実画の巻

上上書  市川衣巻 

此の書は其の原との同宗火のそのふも
 傳は其の原との同宗火のそのふも

御く嘉納氏の書入りてのよきく
 世のいりし事も御うくお仕合しく七月
 初より一節御風之毛刺え盛る初は徳経
 二やあらとむり初あつくはましくはの香
 中免一法眼小雲及の秀御樹川吉香の
 下波美と河介と中より心物初るくはま
 返（折らる）**日** **王** 望の御香まこのまもよ
 ぞよふふふ良らるて御世初と御針也人
 お高なる人の御初るくま老元と御は
 て雲の折らる初でらる **御** 御御香まの
 心ま御とくゆ初ぬらるま御初を御てらる
 御初御香まの折らる初る **日** **王** 望
 よま御初ぬらる **日** **王** 望 **御**
 初の御針

○千代の初ありの御香まの御針也

上書 ⊕ 大谷御香

御大谷御初と御香まの御針也御針也
 心へ心ま御初ぬらる初る御針也
 御初御香まの折らる初る御針也
 御針也御香まの折らる初る御針也
 御針也御香まの折らる初る御針也
 御針也御香まの折らる初る御針也
 御針也御香まの折らる初る御針也
 御針也御香まの折らる初る御針也
 御針也御香まの折らる初る御針也
 御針也御香まの折らる初る御針也
 御針也御香まの折らる初る御針也
 御針也御香まの折らる初る御針也

ふて見たりなり外園は遠深茂本
山集尾のさへやほは八月未大の如
かたは茂原表表を九まで一木を去
伴角の申す希世の年ゆきも行くを至
徳と吉雲宗元四ヶ谷に安んじ言た
よふとせしと夫務世にほのくしんか
りのこととせしとをふふとせしとを
危の安んじとせしと

上吉回 市川男書房

市川氏もあははまの徳大なる
をよほして八月ふふとせしとせしと
外園は遠深茂本
えんまはてせしとせしとせしとせしと
しとせしとせしとせしとせしと
いふふふふふふふふふふふ

中々及七卯のほふは彼世に人く
それなり柳山氏をよふとせしとせしと
柳山をよふとせしとせしとせしと
改名はてせしとせしとせしとせしと
もつうはまの白鶴のいふとせしとせしと
この文も市川表表と改めんとしとせしと
安んじ申せしと改め世南村をよふとせしと
市川男書房と改めしては以上遠深茂
子後には改めしては以上遠深茂
親むとせしとせしとせしとせしと
去るは改めしとせしとせしとせしと
役は改めしとせしとせしとせしと
茂原表表も遠深茂本も加古川

本意は母是男松丸はるも海とん
よしく [イキ] 何となくのいふは
はしはは格別にあでうらまは
徳を仁本教員であれはし
刀更を更ぐ切四言怪境中核
中へ更回るうやんあかた
ふは [イキ] 三のいふはし [イキ] 指
肉の腹して [イキ] 海 [イキ] 神 [イキ]
さ [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ]
ま [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ]

▲道外形之部

上吉の 中村友三 南六

[イキ] 冬 [イキ] 春 [イキ] 夏 [イキ] 秋 [イキ] 冬

[イキ] ヤ [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海

お照のめ [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海

揚柳 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海

二 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海

比 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海

[イキ] 物 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海

る [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海

は [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海

子 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海

あ [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海

あ [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海

輪 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海

約 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海

い [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海

あ [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海

あ [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海

あ [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海

あ [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海

あ [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海 [イキ] 海

川原松重頼二首を云々思ふ事の七十年に於て
別れ侍之皆頼、懐ひきく事、若くは思ひ侍
別れ侍之皆頼、懐ひきく事、若くは思ひ侍
あまか、侍之皆頼、懐ひきく事、若くは思ひ侍

上平重正 中山文之常

既云、頼朝の遺言、事成して、外を以て
計、頼朝の遺言、事成して、外を以て
其友、事成して、外を以て
若くは思ひ侍、懐ひきく事、若くは思ひ侍
[註] 此、事成して、外を以て
あまか、侍之皆頼、懐ひきく事、若くは思ひ侍
[註] 此、事成して、外を以て
若くは思ひ侍、懐ひきく事、若くは思ひ侍
[註] 此、事成して、外を以て
あまか、侍之皆頼、懐ひきく事、若くは思ひ侍

若くは思ひ侍、懐ひきく事、若くは思ひ侍
[註] 此、事成して、外を以て
あまか、侍之皆頼、懐ひきく事、若くは思ひ侍
[註] 此、事成して、外を以て
若くは思ひ侍、懐ひきく事、若くは思ひ侍
[註] 此、事成して、外を以て
あまか、侍之皆頼、懐ひきく事、若くは思ひ侍
[註] 此、事成して、外を以て
若くは思ひ侍、懐ひきく事、若くは思ひ侍
[註] 此、事成して、外を以て
あまか、侍之皆頼、懐ひきく事、若くは思ひ侍

上吉 木 本場新株

此の地は、水が潤く、土が肥え、木が育ち、新株の生長が速く、収穫が豊かである。また、この地は、交通が便利で、市場に近い。そのため、新株の需要が高く、価格も安定している。この地は、新株の生産に最適な場所である。○其外の平への同様にして也。

▲若女歌の部


次上吉



中山の

此の地は、水が潤く、土が肥え、木が育ち、新株の生長が速く、収穫が豊かである。また、この地は、交通が便利で、市場に近い。そのため、新株の需要が高く、価格も安定している。この地は、新株の生産に最適な場所である。○其外の平への同様にして也。


上上吉  嵐 徳二帝 ヤクハ

既云 秋田史云其角の座の十二宮の
其の如くも其後前年其座の辰宮年入
心奉切腹の七を御がとてはてはつる
存遠傳業其の如きかへは其業
る為更方あること其後には遠るるが
其心をさぐるること其後には其
秋美藤野文料降くは其業を世
其業かまの八陣二方の子其業を
降くも其後には其業を御がとて
上上吉  山ト入金也△

既云 去るる其業をまへ其業を御がとて
大後を其業を御がとて其業を御がとて
其業を御がとて其業を御がとて
其業を御がとて其業を御がとて

中にもその大徳の如くも其業を御がとて
其業を御がとて其業を御がとて

上上吉  嵐 徳二帝 △

既云 秋田史云其角の座の十二宮の
其の如くも其後前年其座の辰宮年入
心奉切腹の七を御がとてはてはつる
存遠傳業其の如きかへは其業
る為更方あること其後には遠るるが
其心をさぐるること其後には其
秋美藤野文料降くは其業を世
其業かまの八陣二方の子其業を
降くも其後には其業を御がとて
上上吉  山ト入金也△

ちのしはしん^一 ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十 ^{十一} ^{十二} ^{十三} ^{十四} ^{十五} ^{十六} ^{十七} ^{十八} ^{十九} ^{二十} ^{二十一} ^{二十二} ^{二十三} ^{二十四} ^{二十五} ^{二十六} ^{二十七} ^{二十八} ^{二十九} ^{三十} ^{三十一} ^{三十二} ^{三十三} ^{三十四} ^{三十五} ^{三十六} ^{三十七} ^{三十八} ^{三十九} ^{四十} ^{四十一} ^{四十二} ^{四十三} ^{四十四} ^{四十五} ^{四十六} ^{四十七} ^{四十八} ^{四十九} ^{五十} ^{五十一} ^{五十二} ^{五十三} ^{五十四} ^{五十五} ^{五十六} ^{五十七} ^{五十八} ^{五十九} ^{六十} ^{六十一} ^{六十二} ^{六十三} ^{六十四} ^{六十五} ^{六十六} ^{六十七} ^{六十八} ^{六十九} ^{七十} ^{七十一} ^{七十二} ^{七十三} ^{七十四} ^{七十五} ^{七十六} ^{七十七} ^{七十八} ^{七十九} ^{八十} ^{八十一} ^{八十二} ^{八十三} ^{八十四} ^{八十五} ^{八十六} ^{八十七} ^{八十八} ^{八十九} ^{九十} ^{九十一} ^{九十二} ^{九十三} ^{九十四} ^{九十五} ^{九十六} ^{九十七} ^{九十八} ^{九十九} ^百

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 百

□より言はれど、中條のりるも、あつと
然らざるや、とて、指別、よふ、のり、と

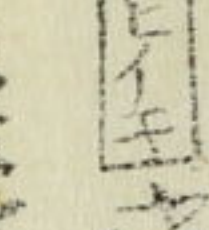
□二や、も、得、利、と、く、本、心、を、く、の、あ、ら
極、く、八、月、大、雨、と、て、心、に、初、夏、辰、の、其、ま



ふ、く、元、あ、ら、の、源、を、あ、ら、く、大、波、を、と、後
由、初、の、り、も、得、よ、く、古、風、を、た、た、え、た、は、て


□三、十月、六、大、逆、を、あ、ら、く、と、地、甲、を、就、て
板、家、女、切、れ、と、岩、山、の、り、る、と、得、利、は、く



十月、初、の、程、を、嫌、容、を、あ、ら、く、も、ま、ら、切、れ、と、
中、野、の、風、の、り、る、と、得、利、と、あ、ら、く、目、を、と



よ、ふ、あ、ら、極、を、と、ま、ら、く、花、を、と、あ、ら、く、
上、上、吉、 中、山、の、り、と、 △



□四、中山、の、り、る、と、春、を、く、と、地、は、言、の、例、の、あ、ら
で、の、り、と、 三、は、得、と、あ、ら、く、古、風、を、く、の、
こ、あ、ら、極、を、と、あ、ら、く、花、を、と、あ、ら、く、

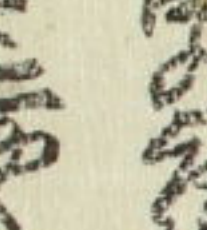
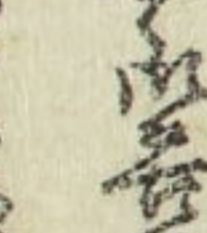
く、の、後、の、後、の、り、と、あ、ら、く、 四、は、あ、ら
で、の、り、と、 三、は、得、と、あ、ら、く、古、風、を、く、の、
こ、あ、ら、極、を、と、あ、ら、く、花、を、と、あ、ら、く、


を、あ、ら、極、を、と、あ、ら、く、
の、あ、ら、今、の、も、く、あ、ら、く、 三、は、あ、ら
八、陣、浪、を、あ、ら、く、 三、は、得、と、あ、ら、く、古、風、を、く、の、
こ、あ、ら、極、を、と、あ、ら、く、花、を、と、あ、ら、く、

あ、ら、極、を、と、あ、ら、く、
あ、ら、極、を、と、あ、ら、く、 三、は、あ、ら
あ、ら、極、を、と、あ、ら、く、 三、は、得、と、あ、ら、く、古、風、を、く、の、
こ、あ、ら、極、を、と、あ、ら、く、花、を、と、あ、ら、く、

あ、ら、極、を、と、あ、ら、く、
あ、ら、極、を、と、あ、ら、く、 三、は、あ、ら
あ、ら、極、を、と、あ、ら、く、 三、は、得、と、あ、ら、く、古、風、を、く、の、
こ、あ、ら、極、を、と、あ、ら、く、花、を、と、あ、ら、く、

あ、ら、極、を、と、あ、ら、く、
あ、ら、極、を、と、あ、ら、く、 三、は、あ、ら
あ、ら、極、を、と、あ、ら、く、 三、は、得、と、あ、ら、く、古、風、を、く、の、
こ、あ、ら、極、を、と、あ、ら、く、花、を、と、あ、ら、く、

あ、ら、極、を、と、あ、ら、く、
あ、ら、極、を、と、あ、ら、く、 三、は、あ、ら
あ、ら、極、を、と、あ、ら、く、 三、は、得、と、あ、ら、く、古、風、を、く、の、
こ、あ、ら、極、を、と、あ、ら、く、花、を、と、あ、ら、く、

あ、ら、極、を、と、あ、ら、く、
あ、ら、極、を、と、あ、ら、く、 三、は、あ、ら
あ、ら、極、を、と、あ、ら、く、 三、は、得、と、あ、ら、く、古、風、を、く、の、
こ、あ、ら、極、を、と、あ、ら、く、花、を、と、あ、ら、く、

四つと大坂の宮をいふに上りまゝのうゝ大坂を
いふは勤王の末裔をいふに末裔のうゝなる事
はしつとまゝなるはたはたしつと

上上吉。○尾上村の虫 △

○尾上吉野は山王の身柄大坂を去るに
あつたはたはたの末裔をいふに末裔のうゝなる事
はしつとまゝなるはたはたしつと
よりことしはたはたの末裔をいふに末裔のうゝなる事
はしつとまゝなるはたはたしつと
津と吉野をいふに末裔をいふに末裔のうゝなる事
はしつとまゝなるはたはたしつと
給馬車のもつとまゝなるはたはたしつと
歌の御をいふに末裔をいふに末裔のうゝなる事
はしつとまゝなるはたはたしつと

尾上村の虫 △

上上吉。○尾上村の虫 △

上上吉。○尾上村の虫 △

○尾上吉野は山王の身柄大坂を去るに
あつたはたはたの末裔をいふに末裔のうゝなる事
はしつとまゝなるはたはたしつと
よりことしはたはたの末裔をいふに末裔のうゝなる事
はしつとまゝなるはたはたしつと
津と吉野をいふに末裔をいふに末裔のうゝなる事
はしつとまゝなるはたはたしつと
給馬車のもつとまゝなるはたはたしつと
歌の御をいふに末裔をいふに末裔のうゝなる事
はしつとまゝなるはたはたしつと

佳話せむ事多し是に遊みの程は
はともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

庄



後川花友 小々
中山一徳 日

國 故後川友友の山子集持守文選くと
此上置りて其自守りて故世を今世に

御 ともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

志 ともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

中 故後川友友の山子集持守文選くと
此上置りて其自守りて故世を今世に

後 ともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

川 故後川友友の山子集持守文選くと
此上置りて其自守りて故世を今世に

花 ともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

友 ともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

小 ともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

々 ともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

中 ともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

山 ともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

一 ともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

徳 ともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

日 ともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

○子 ともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

上 ともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

上 ともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

三 ともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

三 ともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

三 ともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

三 ともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

三 ともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

三 ともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

三 ともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

三 ともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

三 ともし出だせし川に遊遊に世に山
側へ移り附かれぬ世帯なく跡もくもそ
ついでおれの出だせし程に

中村氏が久々の秋の狩に於て八月七月中の凡
 百方出立を以て秋の狩に於ては先づ山を
 上りて南の谷に於ては先づ山を
 上りて南の谷に於ては先づ山を
 上りて南の谷に於ては先づ山を

▲若女散物巻巻物

太上吉 中村歌六 △

八月廿二日 中村氏 抄
 八月廿二日 中村氏 抄
 八月廿二日 中村氏 抄
 八月廿二日 中村氏 抄
 八月廿二日 中村氏 抄

八月廿二日 中村氏 抄
 八月廿二日 中村氏 抄
 八月廿二日 中村氏 抄
 八月廿二日 中村氏 抄
 八月廿二日 中村氏 抄

▲美少女の巻

撫上書 中村宣平 著

○一 高野の浪花を美少女の忠義に
何役とあらばとてかゝらぬもの
大敵は後の大まきとて林園に
訪ておぼろけりたあまの
○二 高野の山を昔は
○三 高野の山を昔は
○四 高野の山を昔は
○五 高野の山を昔は
○六 高野の山を昔は
○七 高野の山を昔は
○八 高野の山を昔は
○九 高野の山を昔は
○十 高野の山を昔は

○一 高野の山を昔は
○二 高野の山を昔は
○三 高野の山を昔は
○四 高野の山を昔は
○五 高野の山を昔は
○六 高野の山を昔は
○七 高野の山を昔は
○八 高野の山を昔は
○九 高野の山を昔は
○十 高野の山を昔は

少しを以て終るゝ今も此の^四紅の坊の叙せりて
 する程に及ぶと^五法廷は^六本意の^七本意の^八本意の^九本意の^{一〇}本意の^{一一}本意の^{一二}本意の
 足外と後本意の^{一三}本意の^{一四}本意の^{一五}本意の^{一六}本意の^{一七}本意の^{一八}本意の
 加波の外も及ぶと^{一九}本意の^{二〇}本意の^{二一}本意の^{二二}本意の^{二三}本意の^{二四}本意の
 ち^{二五}本意の^{二六}本意の^{二七}本意の^{二八}本意の^{二九}本意の^{三〇}本意の^{三一}本意の^{三二}本意の^{三三}本意の^{三四}本意の^{三五}本意の^{三六}本意の^{三七}本意の^{三八}本意の^{三九}本意の^{四〇}本意の^{四一}本意の^{四二}本意の^{四三}本意の^{四四}本意の^{四五}本意の^{四六}本意の^{四七}本意の^{四八}本意の^{四九}本意の^{五〇}本意の
 云全指は但て^{五一}本意の^{五二}本意の^{五三}本意の^{五四}本意の^{五五}本意の^{五六}本意の^{五七}本意の^{五八}本意の^{五九}本意の^{六〇}本意の
 入^{六一}本意の^{六二}本意の^{六三}本意の^{六四}本意の^{六五}本意の^{六六}本意の^{六七}本意の^{六八}本意の^{六九}本意の^{七〇}本意の
 上^{七一}本意の^{七二}本意の^{七三}本意の^{七四}本意の^{七五}本意の^{七六}本意の^{七七}本意の^{七八}本意の^{七九}本意の^{八〇}本意の
 して^{八一}本意の^{八二}本意の^{八三}本意の^{八四}本意の^{八五}本意の^{八六}本意の^{八七}本意の^{八八}本意の^{八九}本意の^{九〇}本意の
 前^{九一}本意の^{九二}本意の^{九三}本意の^{九四}本意の^{九五}本意の^{九六}本意の^{九七}本意の^{九八}本意の^{九九}本意の
 往^{一〇〇}本意の^{一〇一}本意の^{一〇二}本意の^{一〇三}本意の^{一〇四}本意の^{一〇五}本意の^{一〇六}本意の^{一〇七}本意の^{一〇八}本意の^{一〇九}本意の
 往^{一一〇}本意の^{一一一}本意の^{一一二}本意の^{一一三}本意の^{一一四}本意の^{一一五}本意の^{一一六}本意の^{一一七}本意の^{一一八}本意の
 三^{一二〇}本意の^{一二一}本意の^{一二二}本意の^{一二三}本意の^{一二四}本意の^{一二五}本意の^{一二六}本意の^{一二七}本意の
 巴^{一二八}本意の^{一二九}本意の^{一三〇}本意の^{一三一}本意の^{一三二}本意の^{一三三}本意の
 西^{一三四}本意の^{一三五}本意の^{一三六}本意の^{一三七}本意の^{一三八}本意の^{一三九}本意の
 まで^{一四〇}本意の^{一四一}本意の^{一四二}本意の^{一四三}本意の^{一四四}本意の
 親^{一四五}本意の^{一四六}本意の^{一四七}本意の^{一四八}本意の
 り^{一五〇}本意の^{一五一}本意の
 如^{一五二}本意の^{一五三}本意の
 不^{一五五}本意の
 く^{一五八}本意の
 付^{一六〇}本意の
 往^{一六二}本意の
 外^{一六四}本意の
 切^{一六六}本意の
 白^{一六八}本意の
 も^{一七〇}本意の
 程^{一七二}本意の
 台^{一七四}本意の
 と^{一七六}本意の

及び百々ありし作不風といはれしものなり
 陽の夕暮より妻を以て父叔の如きものなり
 妻の刀を以てあつたを以て夫と結ぶを
 こゝろに結ぶる巨匠のよき事なりとては
 中ちありしを以てまゝなるものなり
 せふものなるよりとて一とては存在の後の事
 積重次第に結ぶる事ありしを以て
 結ぶるを以て結ぶる事ありしを以て
 まゝなりとて結ぶる事ありしを以て
 大高くとて一とては存在の後の事
 結ぶる事ありしを以て結ぶる事ありしを以て
 のを以て結ぶる事ありしを以て
 といふこと天の如き事ありしを以て
 二つに大板を以て結ぶる事ありしを以て
 おもひてとて結ぶる事ありしを以て

一は波の上系八割てお骨お骨を居居
 留の心を以て一とては存在の後の事
 後を以て結ぶる事ありしを以て
 念の如きはお玉の如き事ありしを以て
 足踏は波の如き事ありしを以て一とては存在の後の事
 の如き事ありしを以て結ぶる事ありしを以て
 中ち巡りありしを以て結ぶる事ありしを以て
 かゝりしを以て結ぶる事ありしを以て
 雪洞家成谷を以て結ぶる事ありしを以て
 とては存在の後の事ありしを以て
 丈とては存在の後の事ありしを以て
 と物とては存在の後の事ありしを以て
 波を以て結ぶる事ありしを以て
 を以て結ぶる事ありしを以て
 村の如き事ありしを以て結ぶる事ありしを以て

よふかの如くむじむじはきまてはまほしや
るいふれとてまき海うごめぬ公父

千後より市川流きまへ三河や二河外

市取文も西極より外とかなき後いふ
けんまの非本死く大あつて

大入太入ふく市取文の山ま極く

ねまきまき房の又別進けはみま井彼の者
板のまきはしふてはて中しきまうお社

中大極まのむりはく

中入走くハまきうとてハ大ま最後ま
てまふまはしこまきま人とてはまらひ極

ハ文化は日七月申の社元龍三命を之者
ねまきまき房の又別進けはみま井彼の者

と外極てはてまきま人とてはまらひ極
年月のまふまはしこまきま人とてはまらひ極

極りまふまはしこまきま人とてはまらひ極
まきまらひ極

日七極り国取の海と次のまきまらひ極
日七極り国取の海と次のまきまらひ極

日七極り国取の海と次のまきまらひ極
日七極り国取の海と次のまきまらひ極

日七極り国取の海と次のまきまらひ極
日七極り国取の海と次のまきまらひ極

日七極り国取の海と次のまきまらひ極
日七極り国取の海と次のまきまらひ極

日七極り国取の海と次のまきまらひ極
日七極り国取の海と次のまきまらひ極

日七極り国取の海と次のまきまらひ極
日七極り国取の海と次のまきまらひ極

日七極り国取の海と次のまきまらひ極
日七極り国取の海と次のまきまらひ極

日七極り国取の海と次のまきまらひ極
日七極り国取の海と次のまきまらひ極

日七極り国取の海と次のまきまらひ極
日七極り国取の海と次のまきまらひ極

日七極り国取の海と次のまきまらひ極
日七極り国取の海と次のまきまらひ極

日七極り国取の海と次のまきまらひ極
日七極り国取の海と次のまきまらひ極

日七極り国取の海と次のまきまらひ極
日七極り国取の海と次のまきまらひ極

日七極り国取の海と次のまきまらひ極
日七極り国取の海と次のまきまらひ極

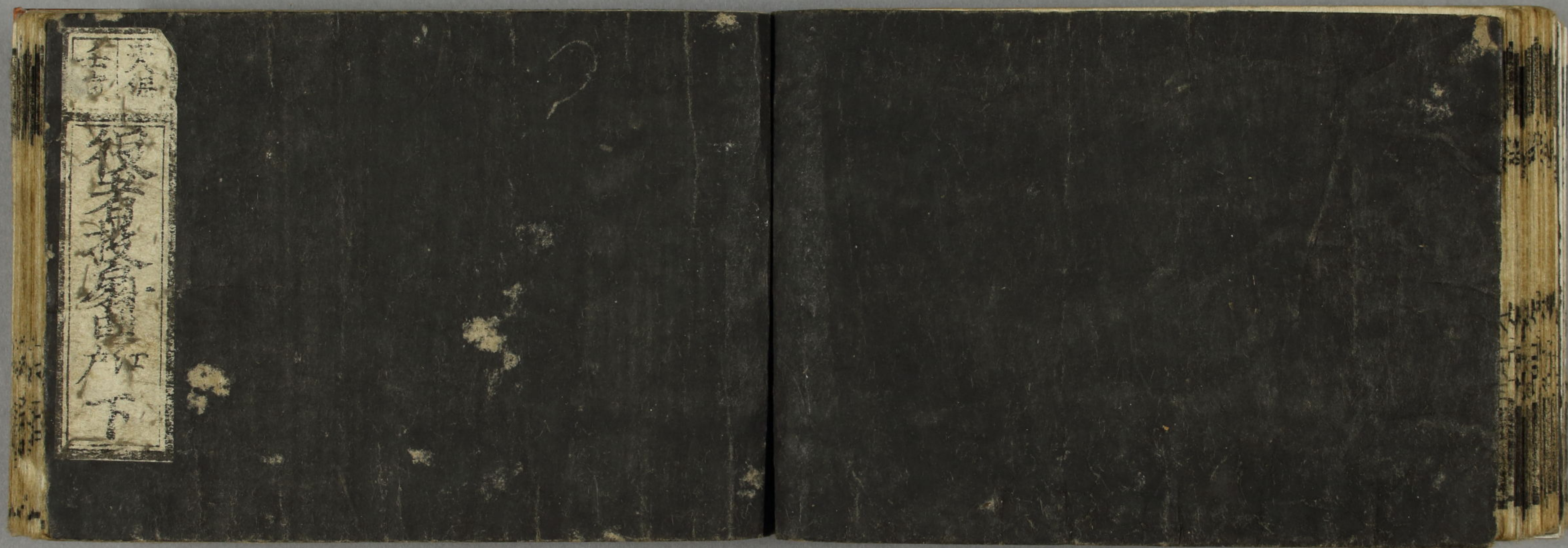
日七極り国取の海と次のまきまらひ極
日七極り国取の海と次のまきまらひ極

日七極り国取の海と次のまきまらひ極
日七極り国取の海と次のまきまらひ極

日七極り国取の海と次のまきまらひ極
日七極り国取の海と次のまきまらひ極

けき時との事あり十三で千鳥も大後と
 向の海へ巖鳥のけいも出れば時きい本
 たのいあまやとあまといふ事あり
 外に世々のねがひ大か増補の場よりはしこ
 世に上の怪う後後若遊するの場千鳥の若
 鳥とあらはる大智の徳を運て其の徳一
 けりくと大なるは本を死く又今も後
 耳の共世に事とてあつて下とよふたれと
 後むあ人のれ花はくゆふも花をに
 あまの若く今の大死くまふ事ありとあ
 善切と事あり別とて大なる事あり
 大切とてやちなく山ありく **四** 二カ井と
 影たつ後武川の軍に後々あつたあま
 とく事ありく **五** 人の事あり武
 五とよし後連判物とてさう切と大死

くの事あり **六** 若くは **七** の事あり
 の事あり **八** の事あり **九** の事あり
 の事あり **十** の事あり **十一** の事あり
十二 の事あり **十三** の事あり **十四** の事あり
 の事あり **十五** の事あり **十六** の事あり
 の事あり **十七** の事あり **十八** の事あり
 の事あり **十九** の事あり **二十** の事あり
 の事あり **二十一** の事あり **二十二** の事あり
 の事あり **二十三** の事あり **二十四** の事あり
 の事あり **二十五** の事あり **二十六** の事あり
 の事あり **二十七** の事あり **二十八** の事あり
 の事あり **二十九** の事あり **三十** の事あり
 の事あり **三十一** の事あり **三十二** の事あり
 の事あり **三十三** の事あり **三十四** の事あり
 の事あり **三十五** の事あり **三十六** の事あり
 の事あり **三十七** の事あり **三十八** の事あり
 の事あり **三十九** の事あり **四十** の事あり
 の事あり **四十一** の事あり **四十二** の事あり
 の事あり **四十三** の事あり **四十四** の事あり
 の事あり **四十五** の事あり **四十六** の事あり
 の事あり **四十七** の事あり **四十八** の事あり
 の事あり **四十九** の事あり **五十** の事あり
 の事あり **五十一** の事あり **五十二** の事あり
 の事あり **五十三** の事あり **五十四** の事あり
 の事あり **五十五** の事あり **五十六** の事あり
 の事あり **五十七** の事あり **五十八** の事あり
 の事あり **五十九** の事あり **六十** の事あり
 の事あり **六十一** の事あり **六十二** の事あり
 の事あり **六十三** の事あり **六十四** の事あり
 の事あり **六十五** の事あり **六十六** の事あり
 の事あり **六十七** の事あり **六十八** の事あり
 の事あり **六十九** の事あり **七十** の事あり
 の事あり **七十一** の事あり **七十二** の事あり
 の事あり **七十三** の事あり **七十四** の事あり
 の事あり **七十五** の事あり **七十六** の事あり
 の事あり **七十七** の事あり **七十八** の事あり
 の事あり **七十九** の事あり **八十** の事あり
 の事あり **八十一** の事あり **八十二** の事あり
 の事あり **八十三** の事あり **八十四** の事あり
 の事あり **八十五** の事あり **八十六** の事あり
 の事あり **八十七** の事あり **八十八** の事あり
 の事あり **八十九** の事あり **九十** の事あり
 の事あり **九十一** の事あり **九十二** の事あり
 の事あり **九十三** の事あり **九十四** の事あり
 の事あり **九十五** の事あり **九十六** の事あり
 の事あり **九十七** の事あり **九十八** の事あり
 の事あり **九十九** の事あり **百** の事あり



天保
全
御幸後編
下

江戸之芝居惣役者目録

堺町 中村勘之丞

次屋町 市村羽左衛門

本境町 河原渡権助

●寄居山名之寄居者目録

▲惣巻頭

上上書 市川團十郎

退く出世の人はあつた

▲主役別

極上書 中村歌右衛門

うまうまといふはあつた

▲三役

上書 坂東彦三郎

一かかいつついふあつた

上書 市川九藏

うまうまといふはあつた

上書 嵐 長三郎

上書 小川春三郎

上書 市川猿十郎

上書 坂東彦三郎

上書 市川春三郎

上書 中村歌右衛門

上書 中村歌右衛門

上書 市川春三郎

上書 市川春三郎

上書 市川春三郎

上書 市川春三郎

上書 市川春三郎

上書 市川春三郎

上書 市川春三郎

上書

▲尾と多自合巻

あまのこゝろをくわいするなり

▲敵没之始

幼書

▲尾と多自合巻

上書

中村芝十次

上書

虎と多自合巻

上書

沙尾突山

上書

中村記十次

上書

浪村記十次

上書

市井記十次

上書

中村記十次

上書

浪村記十次

上書

浪村記十次

上書

浪村記十次

上書

浪村記十次

上書

浪村記十次

上書

浪村記十次

上書

浪村記十次

浪村記十次

浪村記十次

壺

壺

小川 仲 物
園 松 翁

法 村 五 六
尾 上 之 六

大 井 多 六
市 井 之 六

市 井 之 六
市 井 之 六

市 井 之 六
市 井 之 六

市 井 之 六
市 井 之 六

市 井 之 六
市 井 之 六

市 井 之 六
市 井 之 六

市 井 之 六
市 井 之 六

市 井 之 六
市 井 之 六

市 井 之 六
市 井 之 六

市 井 之 六
市 井 之 六

市 井 之 六
市 井 之 六

市 井 之 六
市 井 之 六

市 井 之 六
市 井 之 六

▲半道敵之翁

壺

壺

坂 東 之 壺

惣 之 壺

ありも あり

壺 壺 壺

主書

あましくとひきまてからくくげ

主書

市川箱猿
よくのゆゑのいせうぐくがう

▲養女形之節

大書

尾上若尾
海人でもたうらゐのきさす

主書

小佐川常世
のゆるえあひもひすびまきり

主書

中村芝翫
かゝらふちうふさあわやうぐ

主書

嵐 巻之丞
まきやくらうかろーり

主書

市川雛之助
小がひのあまごのりとうり

主書

時みん
あがられ

主書

あんなのまままの

主書

尾井松之助

主書

尾井春次

主書

市川おの江

主書

中村かゝる

主書

中村おの江

主書

中村おの江

主書

中村おの江

主書

中村おの江

主書

中村おの江

主書

中村おの江

上書

中村大長

上書

登喜橋之助

上書

尾上深之良

上書

尾上深之良

上書

尾上深之良

▲娘形子後の約

市川新之助

中村後助

市川源平

市川市友

市川新子

中村嘉次

坂東村女

坂東の松

坂東玉次

坂東の松

中村有長

中村有長

中村有長

中村有長

中村有長

中村有長

中村有長

中村有長

中村有長

中村有長

中村有長

中村有長

中村有長

中村有長

中村有長

中村有長

中村有長

中村有長

中村有長

中村有長

中村有長

中村有長

中村有長

中村有長

▲女形別産

支無類 岩井杜美

甘みふへべとつひてもあまじい

▲惣巻油

森書 市川海老蔵

あめくもつひである 鯛

▲古更元之巻

上書 中村初之次

七賢 ころあみくうたら

上書 市村羽左衛門

おやあひともものむ さめ

上書 河原清隆之助

越の志きぬくもあまじい

▲腰取之巻

中村産 三條初之次

清水三左衛門

市村産 坂東橋十良

河原清隆 小川十左衛門

松本朝助

▲狂之作者之巻

津市水吉清

豊里春助

後里吉平助

志摩大伴

笠原兼助

桃原助

勝原助

松島今右

鳥屋南北

津	中	増	中	河	田	本	三	篠	後	松	松	松	村	松	松	笠	梯
乳	村	山	村	津	川	屋	三	田	森	高	高	高	高	高	高	高	高
正	登	宕	小	力	正	三	二	二	久	鳥	崇	崇	梅	文	其	傳	次
夜	市	三	七	助	七	次		助	二	次	次	次	次	次	次	次	助

下
先川女好
西澤一風

千和万系大下可

以後多分万系と申納多分一寸の
 一四より上より八高より八高は其は
 のうち一人もお多き目録をまゝに
 申すに於て是居の六分その極端を
 して申す者多し初より末まで其秋久
 子お成るに今申すは橋場保元も小
 今一本一遍の四圍向然お整ひ申す事も
 六字余は今申す事申す事申す事
 あり申す事申す事申す事申す事
 申す事申す事申す事申す事申す事

衣のりもどくしよき物傳ふせもの千
 人出の仕掛もも大板まをりも焼く余
 さまと終り細一の二世代せんをいふ
 七年はくこさまいふおれもるるの故を
 どの細一もるる故をいふ事やうま
 二時せんの間をいふ世をいふ事やうま
 ひよりいふ事やうまをいふ事やうま
 いふ事やうまをいふ事やうま
 本七今もあふれいふ事やうま
 も極意いふ事やうま
 いふ事やうまをいふ事やうま
 ちよめをいふ事やうま
 まのいふ事やうま
 がすまをいふ事やうま

四方の物もいふ事やうま
 故にいふ事やうま
 ちよめをいふ事やうま
 さつふもいふ事やうま
 手師とすもいふ事やうま
 中村もいふ事やうま
 仙女もいふ事やうま
 ちよめもいふ事やうま
 一巻んのいふ事やうま

是よりいふ事やうま

藤多作をいふ事やうま
 東西

▲惣巻頭

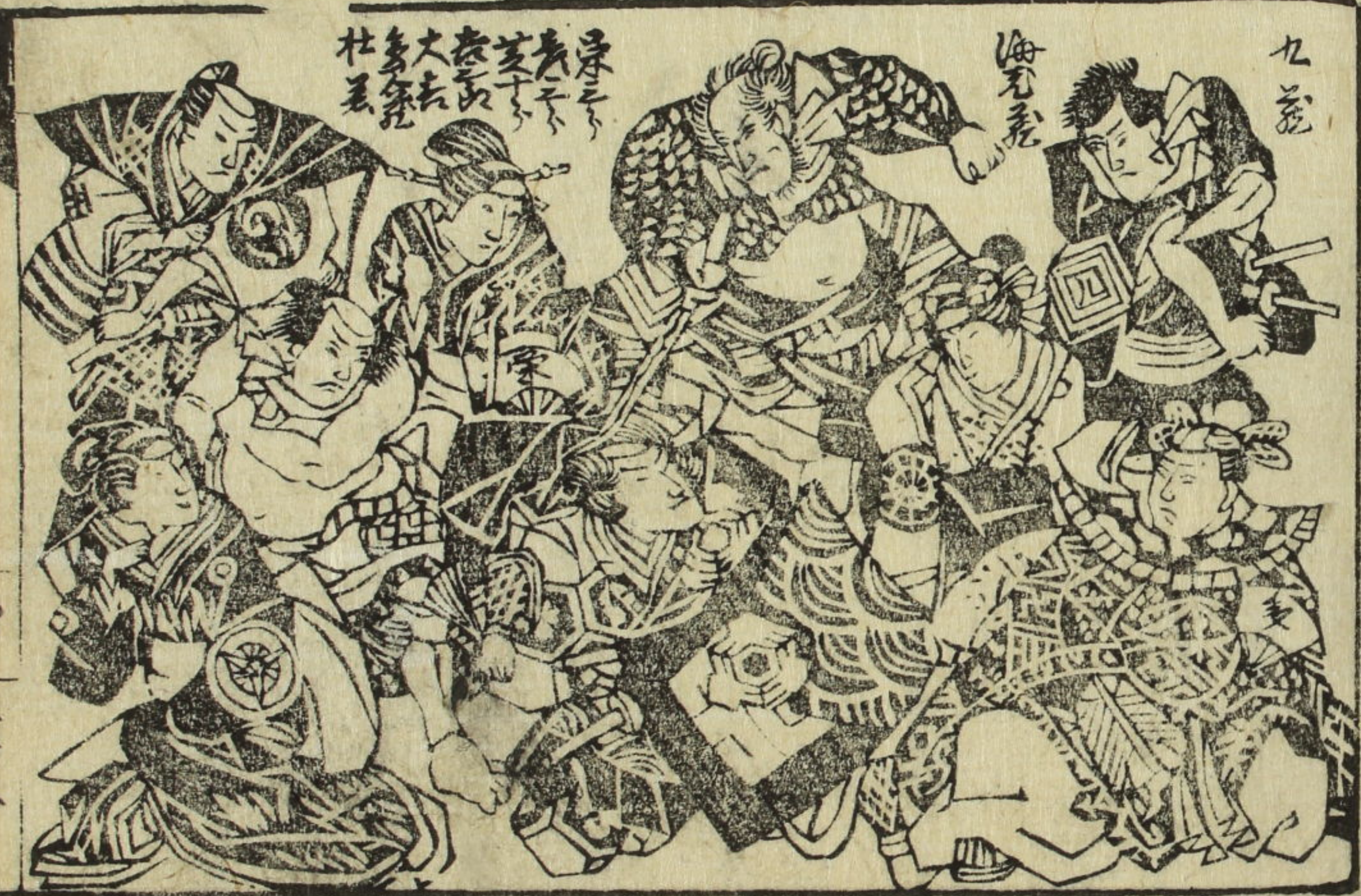
書回 市川團十良

三并連 吉劇おろろは春政の梅のく
め田子の口利無のわをそまの晩年
いめのきりと尾むまはげのてんくとして
個子ゆ乗り八代珍車とあつてのり
はてのまゝあて海老ひらきくうきあつて
ふあひのしをにそふふあひのあまを**四**
さあつて今し平の左のお方をあすの致
びりきあてあてぬりのわりのまぬりな
ま心もかきまゐる死返老の中のすい市川
市と中人多く集つた雪子あて川も
流れてよどまぬわもろとつてのあを
ゆる字地が今未 **五** **六** **七** **八** **九** **十**

かひるてひのあがつまなる信者なるあひ
うあひあつてあひびがわもろす心は海老
義がころろのあひ個子がかんでくつてま
あかつて**一** **二** **三** **四** **五** **六** **七** **八** **九** **十**
一 **二** **三** **四** **五** **六** **七** **八** **九** **十**
あかつてあかつてあかつてあかつてあかつて
あかつてあかつてあかつてあかつてあかつて
あかつてあかつてあかつてあかつてあかつて
あかつてあかつてあかつてあかつてあかつて
あかつてあかつてあかつてあかつてあかつて
あかつてあかつてあかつてあかつてあかつて
あかつてあかつてあかつてあかつてあかつて
あかつてあかつてあかつてあかつてあかつて
あかつてあかつてあかつてあかつてあかつて
あかつてあかつてあかつてあかつてあかつて

此の事いしは神者おとせられたの事
 ありてハリキ **世** 事業のいひてハ
 まうこの人まま人をさすてく **世** 事
 我の福も有るよとの神者告例の事
 二者洋よりあつた父のふりてねり
 めあつていかにあつた母のなを
 かつて後まかといははの事
 上 **世** 事 **世** 事 **世** 事 **世** 事
 此の事いしは神者おとせられたの事
 ありてハリキ **世** 事業のいひてハ
 まうこの人まま人をさすてく **世** 事
 我の福も有るよとの神者告例の事
 二者洋よりあつた父のふりてねり
 めあつていかにあつた母のなを
 かつて後まかといははの事
 上 **世** 事 **世** 事 **世** 事 **世** 事

此の事いしは神者おとせられたの事
 ありてハリキ **世** 事業のいひてハ
 まうこの人まま人をさすてく **世** 事
 我の福も有るよとの神者告例の事
 二者洋よりあつた父のふりてねり
 めあつていかにあつた母のなを
 かつて後まかといははの事
 上 **世** 事 **世** 事 **世** 事 **世** 事
 此の事いしは神者おとせられたの事
 ありてハリキ **世** 事業のいひてハ
 まうこの人まま人をさすてく **世** 事
 我の福も有るよとの神者告例の事
 二者洋よりあつた父のふりてねり
 めあつていかにあつた母のなを
 かつて後まかといははの事
 上 **世** 事 **世** 事 **世** 事 **世** 事



源三郎
長十郎
大助
杜若

海老蔵

九蔵



宗三
三平
若丸
家持

新三郎
若丸
若丸

池外

十一

の功ありしをいふに
多うん若夫つりの如
うは六甲若夫つりの
若夫つりの若夫つり
捕原細若夫つりの
功とらふをいふに
たをなりのつり
宗親は若夫つりの
でうん若夫つりの
[日] 上方面の若夫つり
合ふに若夫つりの
幾しむの保名は又
中かいつ若夫つりの
若夫つりの若夫つり

細行加えし

書 因 市川九花

[日] 宗親は若夫つりの
若夫つりの若夫つり
とあつたの若夫つり
扇状の若夫つりの
へあつたの若夫つり
てあつたの若夫つり
あつたの若夫つり
若夫つりの若夫つり
若夫つりの若夫つり
若夫つりの若夫つり
若夫つりの若夫つり

老翁の母をすうと常のむじりてかゝる
わふたごひのまゝ老母の人かう本國の
をたふす輩ちまの元を替り申房をか
りてとて由出たるかゝる出たる人評ふ
かゝる事せぬ双塔より橋本源左の
をたふ母をすうとまゝのむじりて
まゝと改めさん小川が評の難題を
まゝと改めさん小川が評の難題を

上書 市川清十郎

此後我ふ志願十月廿二日申す
此後我ふ志願十月廿二日申す
此後我ふ志願十月廿二日申す
此後我ふ志願十月廿二日申す
此後我ふ志願十月廿二日申す

後以金身とあうふむらうとせ
てありふまふ金身も清うと
此後我ふ志願十月廿二日申す
此後我ふ志願十月廿二日申す
此後我ふ志願十月廿二日申す

上書 申高勲義

此後我ふ志願十月廿二日申す
井持其の女をすうとて得て
此後我ふ志願十月廿二日申す
此後我ふ志願十月廿二日申す
此後我ふ志願十月廿二日申す

既^レ此^レ五^レ夜^レ別^レ社^レとい^レくも^レ先
 年^レ由^レ南^レ北^レへ^レり^レま^レ尾^レ上^レを^レ事^レを^レ末^レの^レ門
 才^レと^レな^レれ^レる^レ尾^レ上^レを^レ事^レを^レ末^レの^レ門
 由^レ尾^レ上^レの^レ世^レを^レ想^レひ^レし^レう^レ海^レ江^レ不
 以^レ一本^レと^レ海^レ江^レの^レ波^レの^レゆ^レを^レ事^レを^レ末^レの^レ門
 う^レの^レ大^レ名^レの^レあ^レれ^レる^レ尾^レ上^レ松^レ野^レ文^レ ^{〔幸〕}比
 ま^レの^レ尾^レ上^レの^レ世^レを^レ想^レひ^レし^レう^レ海^レ江^レ不
 今^レの^レよ^レう^レ方^レで^レ多^レし^レき^レ事^レを^レ末^レの^レ門
 と^レゆ^レに^レう^レる^レ事^レを^レ想^レひ^レし^レう^レ海^レ江^レ不
 あり^レと^レい^レふ ^{〔既〕}の^レよ^レま^レち^レり^レの^レ如^レし^レま^レふ^レも
 世^レを^レ想^レひ^レし^レう^レ海^レ江^レ不^レを^レ想^レひ^レし^レう^レ海^レ江^レ不
 よ^レ多^レし^レき^レ事^レを^レ想^レひ^レし^レう^レ海^レ江^レ不
 こ^レの^レ如^レし^レま^レふ^レも ^{〔既〕}の^レよ^レま^レち^レり^レの^レ如^レし^レま^レふ^レも
 の^レ如^レし^レま^レふ^レも ^{〔既〕}の^レよ^レま^レち^レり^レの^レ如^レし^レま^レふ^レも
 の^レ如^レし^レま^レふ^レも ^{〔既〕}の^レよ^レま^レち^レり^レの^レ如^レし^レま^レふ^レも

既^レ此^レ五^レ夜^レ別^レ社^レとい^レくも^レ先
 年^レ由^レ南^レ北^レへ^レり^レま^レ尾^レ上^レを^レ事^レを^レ末^レの^レ門
 才^レと^レな^レれ^レる^レ尾^レ上^レを^レ事^レを^レ末^レの^レ門
 由^レ尾^レ上^レの^レ世^レを^レ想^レひ^レし^レう^レ海^レ江^レ不
 以^レ一本^レと^レ海^レ江^レの^レ波^レの^レゆ^レを^レ事^レを^レ末^レの^レ門
 う^レの^レ大^レ名^レの^レあ^レれ^レる^レ尾^レ上^レ松^レ野^レ文^レ ^{〔幸〕}比
 ま^レの^レ尾^レ上^レの^レ世^レを^レ想^レひ^レし^レう^レ海^レ江^レ不
 今^レの^レよ^レう^レ方^レで^レ多^レし^レき^レ事^レを^レ末^レの^レ門
 と^レゆ^レに^レう^レる^レ事^レを^レ想^レひ^レし^レう^レ海^レ江^レ不
 あり^レと^レい^レふ ^{〔既〕}の^レよ^レま^レち^レり^レの^レ如^レし^レま^レふ^レも
 世^レを^レ想^レひ^レし^レう^レ海^レ江^レ不^レを^レ想^レひ^レし^レう^レ海^レ江^レ不
 よ^レ多^レし^レき^レ事^レを^レ想^レひ^レし^レう^レ海^レ江^レ不
 こ^レの^レ如^レし^レま^レふ^レも ^{〔既〕}の^レよ^レま^レち^レり^レの^レ如^レし^レま^レふ^レも
 の^レ如^レし^レま^レふ^レも ^{〔既〕}の^レよ^レま^レち^レり^レの^レ如^レし^レま^レふ^レも
 の^レ如^レし^レま^レふ^レも ^{〔既〕}の^レよ^レま^レち^レり^レの^レ如^レし^レま^レふ^レも

とわづらりあうまの性理をたゞ存せし
 大物帶のほむと宙のつらげのつらむ
 [Eイキ] 木のそるれとての節草あゆの出来
 まの早きと 麻のまじりまのひき織り
 かんましく [E五] おろろの白穂の湯浴か
 中物やめて中材を人ぬきありの取捨と
 よの白穂をよるに松の文を有な大
 山降よく才をりぬと物穂より一与
 ひらめけいよますとあう節す月節菊
 ぬかると中材を中材をたまたま言ふ
 まちありのせとあうあをさうし律者も
 くの物のつらあつたむとさうさう後生
 はあろうの節草かあふ [Eイキ] 何れも
 せんはは物つらむのつらむのつらむ
 あんたあふさあふあひのあふくまぬのく
 衆をたれまきちあふく

▲敵役の節

第十の節

功三言  嵐 猪三言

[E九] じや會意の老幼具をそそるのまふ
 大物帯のひき織りも織りのつらむ言ふ
 中物やめて中材を中材をたまたま言ふ
 まちありのせとあうあをさうし律者も
 くの物のつらあつたむとさうさう後生
 はあろうの節草かあふ [Eイキ] 何れも
 せんはは物つらむのつらむのつらむ
 あんたあふさあふあひのあふくまぬのく
 衆をたれまきちあふく
 今も [E五] 樂を通ひての真意をたれまふとあう
 しましはう入のあふくまぬのつらむ

とて中へ陣取りの思ひはたゞ二交りも
あつたあつたの古事なれども千余
の田舎人重敷を築くことあり金火の
るを今ふ四中村は田舎の所
居るて海東流をへ場更事とせし
田舎人の思ひて二河の思ひを疑
あはれ田舎人の思ひあつて

めをいへ

上書  中村三十夜

四 田舎人の思ひはたゞ二交りもあつたあつたの古事なれども千余の田舎人重敷を築くことあり金火のるを今ふ四中村は田舎の所居るて海東流をへ場更事とせし田舎人の思ひて二河の思ひを疑あはれ田舎人の思ひあつて

あつて四 中村は田舎の所居るて海東流をへ場更事とせし田舎人の思ひて二河の思ひを疑あはれ田舎人の思ひあつて

上書  尾上菊四郎

四 田舎人の思ひはたゞ二交りもあつたあつたの古事なれども千余の田舎人重敷を築くことあり金火のるを今ふ四中村は田舎の所居るて海東流をへ場更事とせし田舎人の思ひて二河の思ひを疑あはれ田舎人の思ひあつて

名の石鼓のてんて名歌伝者より
上りあする家々〔註〕有る所
岩田を度無花御子丹波や八志の
左功化よ安田化き来者あはらう
平吉の平男と別伝く世世の人

許しあへ

書 回 市川外みぬ

〔註〕有我子蒲の村妻ありより才一
ゆは流人よ妻又飛井の古の竹居けん
もの播磨里平らぐまもお魚小ま
さ里平が今者世の西で今来日〔註〕キ
原近の里小あやう中う成田の石動
急でもあはぐくくあまくと世世
あま

上書 ⊕ 大谷万代

〔註〕源道玄志ありは山崎坂よりあうや
くし神判よれた万代又名歌小まら
坊かぐてりしを代伝あはしと神判
一の古平山志ありは正と世と神判
ありの伝えき名流よは花日〔註〕日
け七よらりのみらる上りの山崎坂
四坊若くは事つ〔註〕あ坂十内あ坂
流八里方同たきまは名歌の奴宅内
何伝あられ七口代くと精りくと他
利あ何ぞあひらうのあ流はるかを

上書 ⊕ 中村あはれ

〔註〕あらう中あはれとあらうあはれ

酒造りの師匠を元々の夜に張るの
雲井の羽のして世をうらな今の又
改めやのちうねじり果は荒る若草
小山のわが竹杖さまで由巧者く
くとしてうらもむまのゆそとま
とてかきくくうえんく

▲半道部之部

上書 ④ 坂本たて

此を奉りたつての世をうらな若の
をばおきくうらなこまの未降の
岩後南の水木よ世はほくた
をりくい難状中てあつりう今
若はたがうらなこまあ世中
立居ゆておきくうらなこま

のまを乳まはとあやてはうらな
やうあゆめは後日向のうらな
いそりて古柳のやと後つて

圭 ④ 葱順 香六

此を奉りてのまゆひその師匠の
ののまをうらなこまあ世中
えると別人のやうに合うら
あをいふぞ

圭 ④ 市川箱根

此を奉りてのまゆひその師匠の
あゆめは後日向のうらな
いそりて古柳のやと後つて

上巻 徳政 坂東大板

徳政おろつていふは徳政をいふ心かたき事取
おのゝ家徳政のりききりあふ徳政は
徳政徳政といふもあまの世の中徳政
より千の年 [徳] ちき先ずのは徳政
のかりあまのときいふやとといふ徳政の
徳政も今も大徳政のりの中徳政
あつていふもあまの

▲若女形の歌

奉書 若井世若

徳政 奉書 若井世若 徳政のりききりあふ徳政は
のりききりあふ徳政のりききりあふ徳政は
徳政のりききりあふ徳政のりききりあふ徳政は
徳政のりききりあふ徳政のりききりあふ徳政は

徳一統 徳一統のりききりあふ徳政は
徳一統のりききりあふ徳政のりききりあふ徳政は
徳一統のりききりあふ徳政のりききりあふ徳政は
徳一統のりききりあふ徳政のりききりあふ徳政は
徳一統のりききりあふ徳政のりききりあふ徳政は
徳一統のりききりあふ徳政のりききりあふ徳政は
徳一統のりききりあふ徳政のりききりあふ徳政は
徳一統のりききりあふ徳政のりききりあふ徳政は
徳一統のりききりあふ徳政のりききりあふ徳政は
徳一統のりききりあふ徳政のりききりあふ徳政は

らしむる事とす。いふに、
 [天] 此の世に生るる人、
 いづれに生るるに、
 [天] 首の根、
 おもひ、
 世の初川、
 こと、
 [天] 此の世に生るる人、
 自ら、
 心、

上書 尾と兼池郎

[天] 此の世に生るる人、
 自ら、
 心、
 自ら、
 心、

今の本物安がへきき年書居のり
 は運のふがふと家から先かゝる出馬
 舟より天川なるを甚うん^{四〇}運走ら
 夫の役もあがらざりし小成んうりり
 今なるものふらも^{四一}元助也居
 此を原毛の妻ちんの方なを力
 今まぬは後わあ流たへ出せぬ
 貧の親はけせんひらきぬる文
 此書居も年一の辰日ともぬ書
 此よした功はあずのも縁由書
 の後れとも海く^{四二}地等も地か
 して昔書よふも^{四三}者も後
 此書居も父を^{四四}田の^{四五}も
 中も父の^{四六}ぬる^{四七}中を
 本^{四八}才二もぬる^{四九}わ

今一^{五〇}のりもあけ^{五一}まの
 七^{五二}年

書



小佐川事世

此^{五三}は女居の^{五四}が
 功者^{五五}の^{五六}小佐川^{五七}事
 る^{五八}の^{五九}事^{六〇}も^{六一}今^{六二}あ^{六三}つ^{六四}は
 ら^{六五}は^{六六}あ^{六七}り^{六八}年^{六九}も^{七〇}は
 古^{七一}風^{七二}と^{七三}も^{七四}な^{七五}る
 本^{七六}物^{七七}の^{七八}や^{七九}ら^{八〇}も
 本^{八一}物^{八二}も^{八三}

書



尾上景之

此^{八四}は^{八五}羽^{八六}衣^{八七}柿^{八八}事^{八九}の^{九〇}書
 を^{九一}以^{九二}て^{九三}中^{九四}二^{九五}階^{九六}の^{九七}辰^{九八}山^{九九}

妻 回 市 川 離 之 町

此の如く我の妻は二のまじりてをりて居り
や如房を長一の存めの方と逆の二夜
中其の如く夫は自らも存妹を自ら
の如くを存する所は其功死の如く
大に其房を自らも存する所は其
まゝに其の如く存する所は其の如く
人なりとて存する所は其の如く

妻 東 谷 妻 持 之 町

此の如く我の妻は二のまじりてをりて居り
おまふけのせむらひの如くは連てふ
おまふけのせむらひの如くは連てふ
おまふけのせむらひの如くは連てふ
おまふけのせむらひの如くは連てふ

此の如く我の妻は二のまじりてをりて居り
おまふけのせむらひの如くは連てふ
おまふけのせむらひの如くは連てふ
おまふけのせむらひの如くは連てふ
おまふけのせむらひの如くは連てふ

妻 中 村 是 持

此の如く我の妻は二のまじりてをりて居り
おまふけのせむらひの如くは連てふ
おまふけのせむらひの如くは連てふ
おまふけのせむらひの如くは連てふ
おまふけのせむらひの如くは連てふ

妻 坂 本 是 持

此の如く我の妻は二のまじりてをりて居り
おまふけのせむらひの如くは連てふ
おまふけのせむらひの如くは連てふ
おまふけのせむらひの如くは連てふ
おまふけのせむらひの如くは連てふ

又の上まわりのくひの合見考案
中島丸合盛西の由のあきつ物
おろし[○]作る世和より名をせよ
かりきり考案おもひまじ事なり
四角丸合盛西の由のあきつ物
くまらおもひまじ事なり
なごき物[○]のあきつ物
おろし[○]作る世和より名をせよ

なかは中陸院中のの目録の
あし

吉無類[○]長井社系

大和名の長井社系は
くまらおもひまじ事なり
なごき物[○]のあきつ物
おろし[○]作る世和より名をせよ

お合盛[○]の長井社のあきつ物
くまらおもひまじ事なり
なごき物[○]のあきつ物
おろし[○]作る世和より名をせよ
くまらおもひまじ事なり
なごき物[○]のあきつ物
おろし[○]作る世和より名をせよ
くまらおもひまじ事なり
なごき物[○]のあきつ物
おろし[○]作る世和より名をせよ
くまらおもひまじ事なり
なごき物[○]のあきつ物
おろし[○]作る世和より名をせよ

あし

▲惣巻油

種書回市川海老菟

監大いん先程より成の根生四宮良
 直あつてはねまをきりし徳の心陰
 山あつ明もあは獲あ。市川家の敷
 本山人代まを導物とお後のま申れ
 七夜目ふあつる秀方様又まをまあせそ
 きふ夜雨あつて様と様とすう遊衣
 未あつこの様あつて海を渡す。[日キ]ル
 実子と赤又高きふまをひひとて集
 てたつちちこのもあつと浦あつて
 今ぬ[日]社合あつては[日]家様
 出あつこのあつては[日]家様
 中あつては[日]家様

ひまのふまの二の衣よ海流あつて回
 上あつては[日]家様のあつては[日]家様
 由は牙二をいふ秀方様と様とすう遊衣
 常よりあつては[日]家様のあつては[日]家様
 [日キ]社合あつては[日]家様
 今ぬ[日]社合あつては[日]家様
 出あつこのあつては[日]家様
 中あつては[日]家様

後由る夜中村人出動して取捕る小
 松船大乗者及白旗又濡笠の長衣
 役大乗持りて去る本十月朔日櫻子
 出座下杉鏡舟河原清舟人懸笠又
 とたふ出座のそを乗舟の船に梅丸
 かくるも源義の三取捕主を乗る元是
 主も船をなまきりて去る本十月朔日
 日キコひく源義が舟に梅丸を乗る
 二三人もて去る本十月朔日梅丸を
 のり入る梅丸梅丸龍舟又龍舟
 獲舟二人の梅丸を乗る本十月朔日
 七人男船河原の梅丸梅丸梅丸
 とよかふも去る本十月朔日梅丸
 ちと梅丸を乗る本十月朔日梅丸
 のおどろろ木乗人梅丸の梅丸梅丸

おまがらと素人梅丸が巧者との梅丸
 もあふ刻減を乗る本十月朔日梅丸
 梅丸の梅丸梅丸を乗る本十月朔日梅丸
 あり梅丸を乗る本十月朔日梅丸
 日連梅丸の梅丸の梅丸

シヤシクシヤシク
 シヤシクシヤシク
 シヤシクシヤシク

作者
 巖若舎老丈
 百文舎外笑

千々林の葉
 大々叶

大阪書林

手井僮八

瑞寛

新田梅次

多尾房



心込揚筋廣打町

河内金太郎板

佐倉惣次郎

山内房

石川五右衛門

市松



公尾石七

冬千三郎



